

2009年10月修正

「はなみずき」(戯曲)

作 佐藤良士

保子 五十八歳 主婦

雄吉 五十九歳 来年定年

芳江 八十五歳

山田 シルバードリーの営業マン(女)

三男 大学生、就職内定。

標準的なリビング。正面に簡単な応接セット。上手はダイニングに続いているはずだが、客席からは見えない。下手がりリビングの入り口になっている。応接セットの位置からは明るいガーデニングの庭が見えるはずである。

応接セットの後方に古い小さなオルガンがある。

雄吉が応接セットでシルバードリーの営業マンの山田(女性、四十歳前後)と向かい合い、主婦の保子はダイニングでお茶の支度をしている様子。

山田 で、ご家族はお父様と、お母様と、お子様が三人でよろしいでしょうか？

保子(声) はい。

山田 皆さん、男のお子さんでございましたね。

保子(声) はい。

雄吉 (手を上げ) 質問ですが、いいですか。

山田 (雄吉を指さして) ハイ、どうぞ。

雄吉 シルバードリームというのは、要するに老人の夢ということなんですか？

山田 いえ、老人の夢ということではなくて、老後の夢、つまりですね、これから老人になられる方が対象なんです。

雄吉 つまり、老後は、それまで出来なかつたいろんなことを、あれもしたい、これもしたい、まあ、そうことですか？

山田 ええ、まあ、平たく言えばそうなんです。でも、普通皆さんお考えになられる老後の夢といえは、趣味とか、旅行とか、そういうことを考えておられるんですが、私どもの社では、

お二人のこれからの長い人生を、より豊かに、かけがえのないものにするための、第二の人生のプランをご提案したいと考えているんです。

保子がお茶の支度をして登場、山田と雄吉の前にお茶を置く。

山田 あ、ありがとうございます。それで、上のお二人のお子さんは結婚されて独立されているわけですね。

保子 いいえ、二番目の二郎は独立はしてるんですが、結婚はこれからなんです。

山田 あ、じゃあ、ご結婚は来年か、再来年か、そのうちということでは

保子 いいえ、来週

山田 あ、はい、それは、まあ、おめでとうございます。じゃあ、まあ、二番目の方も結婚されているということでは……。下の子供さんは、学生さんですか？

保子 はい、でも、来月、卒業なんです。

雄吉 卒業なんて、まだ早いんじゃないかな。

山田・保子 （雄吉を見て）え？！

雄吉 僕は、まだまだ働けるんだし、卒業なんてまだまだ先のことです。

山田 あ、お父さまのことですか。皆さん確かにそのように仰るんです。けど、六十歳がなんととってもこれからの人生のスタート。第二の人生を今からしっかりと考えておかないといけませんわ。

保子 そうですよ。確かにそうですよ。お父さん、私たちも考えましょうよ。ね、老後の人生

雄吉 老後、老後なんて言ったって、今は昔の人の八掛けつていうじゃないか。それなら、僕は来年四十八だ。老後なんてまだまだ先のことにはたいよ。

保子 もちろん、まだまだ先のことですよ。でも、もう子供達に手がかからなくなるんだし、お父さん、来年定年なんですよ。

山田が庭のほうを見て

山田 いいお庭ですねえ。あれ、花みずきですね。白。少し膨らみかけてる。

雄吉 花みずき？。うちの庭に花みずきなんかあったかな。

保子 知らないんですか。お隣に戴いたんですよ。（山田に）お隣、ご夫婦でガーデニングに熱心なんです。花みずきも大きな木

が二本あるんです。赤と白。私ね、花みずきの花が咲くとあ
あ、春だなって思うんです。

山田 私もです。町角の何でもない景色の中で似合いますよね、花
みずきって。(雄吉に) 御主人は？

雄吉 ガーデニングですか。

山田 いいえ、花みずき、お好きですか。

雄吉 さあ、好きも嫌いも、今までそこらへんのことはあんまり気
にしたことなかったですよえ。

山田 そう、そこですよ。ね、花みずきがお家の庭にあることさえ、
忘れていらっしやる。今までご家族のために一生懸命に働い
てこられたんですよ。でも、これからはご自分と奥様のた
めに人生を送られるというのも悪くないんじゃないでしょ
うか。さっき仰つられたように御主人はまだ四十八でいらっし
やる。これからのほうが長いんです。この長い長い第二の時
間をいかに充実した時間にするか、それが大切なんではない
でしょうか。

山田がカバンからパンフレットを出して二人の前に置く。

山田 これ、ご主人と奥様に是非ご覧になって戴きたいんです。

それから、山田が立ち上がって、厳肅な調子で語り始める。

山田 つばめは夏は日本で暮らして、冬になったら南の島に帰って
いくってご存知ですわね。

保子 はい、私のお家では、夏になるといつも軒下で、つばめが巢
をこしらえていました。

山田 反対にカモや白鳥たちは、春になると北の国に帰って行きま
す。

保子 公園の池に来ていた、沢山のマガモやコハクチヨウたち、あ
の子たちは、みんなもう北の国に帰ったのかしら。

山田 すずめや、ひよどりや、うぐいすたちも季節ごとに移ってい
くんです。

保子 まあ、知らなかった。でもすずめはどこへ行くの。もしかし
たらすずめのお宿。

山田 さあ、それは分かりません。でもみんな鳥達は自然の中で懸
命に生きています。(パンフレットを開いて二人に示しな
がら) 人間も自然とともに生きなければいけません。自然と
ともに生きる、これが、わがシルバードリーム社が、皆様に
お勧めしています、老後を豊かにお過ごしするための、提案

型のプランでございます。さあ、今までの間違った生活を捨てて、本当の生活、自然とともに生きる、安らかな貴い生活を始める時でございます。

山田が、牧師のように雄吉と保子を促して立ち上がらせる。すると二人もパンフレットを持って山田の横に並んで、朗読を始める。 BGM、四季の歌。

雄吉 四月、春の牧場で刈り取った羊の毛。

保子 五月、父さんが刈り取った羊の毛を、紡いで織ったシヨールと手袋。

山田 六月、みんなでつくったろうそくと、あまから育て、心を込めて仕上げたリンネル。

三男が入ってくる。山田が三男にもパンフレットを渡し、横に並ぶように促す。

雄吉 七月、夏の畑で育てたニンジン、トマト、ピーマン、法蓮草。

保子 八月、父さんが育てたニンジン、トマト、ピーマン、法蓮草で作った栄養たっぷりの野菜サラダ。

三男 九月、白樺の木から、僕がナイフで切出したほうきと屋根板。

雄吉 十月、かえでのじゅえきを、煮つめて、煮つめて、煮つめて、とったかえで砂糖。

保子 十一月、かえで砂糖と蜂蜜を入れて頂く、とっても美味しい午後の紅茶。

山田と三男 十二月、放し飼いの鷺鳥から子供たちが集めた鷺鳥の羽根の羽毛のコート。

雄吉 そうして、冬になったら温室でトラック一杯の花を育てて

保子 世界中の人たちに配ってあげよう。

山田 素晴らしい、あこがれのカントリーライフ。太陽と自然の中の生命の時間。

三男 いったい、なんなんだ。このプチ演劇風の詩の朗読は!?

突然、BGMが終わる。

保子 あら、三男、あなた、いつ帰って来たの、ちっとも気付かなかったわ。

三男 さっきから朗読に参加していたじゃないの。

山田 あ、こんにちは。失礼しました。今、お父様とお母様にカン

トリーライフをお勧めしていたんですよ。

保子 そうよ、私たちね、これから自然の中で暮らすのよ。

雄吉 そうだよ。これが本当の生活だ。自然の恵みの中でシルバーライフを送るんだ。忘れていた風の匂いや季節の音楽を思い出すんだ。

三男 カントリーライフって、父さんも母さんも、キャンプも行ったことないじゃないか。

保子 あなた達が小さいころはよく行きましたよ。ねえ、お父さん。
雄吉 いったったか、母さんが川に落ちて、下着まですぐ濡れになったことがあったな。

保子 あれはこの子が川に落ちて、私、必死で助けたんですよ。

三男 僕がまだ小学校に行く前、夏にみんなで山のバンガローに泊まった時のことだよ。僕はお兄ちゃんたちと一緒に空き缶で作った船を川に流していて、落ちてしまったんだ。

保子 お父さん、忘れたんですか、お父さんは、私や子供たちを放つておいて、一人で別なところへ行ってたんですよ。私や三男が川に落ちたのも知らずに。

雄吉 みんなのためにな。お父さんはみんなのために、上流で魚を捕まえようとしてたんだ。いつもみんなのために働いていたんだ。

山田 そうですよ。これまでお父様はご家族のために働いて来られたんですから、今からはわが社の分譲するこのシルバーカントリーに入居されて、本当の人生を送られるんですよ。

山田が三人を促して椅子に座って、パンフレットを見せながら

山田 これが、わが社が推進していますシルバーライフプランで、カントリーライフを満喫して戴ける、自然いっぱい畑とログハウス風の住宅がセットになっております。

保子 お庭がこんなに広いわ。ここならいろんな野菜やお花が沢山作れそう。

雄吉 このログハウス風の家も面白いね。

保子 暖炉もあるみたいですよ。

雄吉 それじゃあ、冬はかなり寒いかもしれないなあ。

山田 いいえ、わがシルバードリーム独自の断熱設計で冬でも快適に過ごせるようになっております。

三男 でも、父さんも母さんも、野菜なんか作ったこと無いじゃないか。

山田 このシルバーカントリーに入居される方はそのような方ばかり

ですよ。お隣もお向かいも、皆さん同じような年配のお仲間ですから、助け合われて充実したカントリーライフを送っておられますわ。

芳江（八十五歳）がリビングにあわてた様子で入ってくる。

芳江 保子さん、保子さん。大変、老人会のお花見、今日じゃなかった？

保子 おばあちゃん、お花見、いつだったんですか。

芳江 確か四月六日だったわ。

保子 じゃあ、明日よ。四月六日は明日ですよ。

三男 おばあちゃん、お花見って梅のこと？。

芳江 二郎、帰ってたの。（山田に気付いて）あら、春子さんも一緒に。

三男 おばあちゃん、僕、兄ちゃんじゃないよ。

山田 私、春子さんじゃなくて、山田です。

芳江 何言ってるの。保子さん、変な人たちだねえ。あなた達、もうすぐ結婚するんで嬉しくて頭がどうかしちゃったの。

保子 そうですよ。この人たち、結婚式のこと以来来たんだけど、どうかしてるの。さあ、お母さん、明日のお花見の準備をするんでしょう。

言いながら、保子が芳江を促して出て行く。気まずい雰囲気で見送る三人。

山田 今日は三月五日ですよ。どうして明日が四月六日なんですか。

雄吉 （山田に）すみません。

三男 最近、よく間違えるんだ。僕、二郎兄ちゃんに似てるかなあ。そりゃあ、似てるだろう。兄弟だよ。

山田 （三男に）私たち、結婚するんでしょうか。

三男 いえ、……そういうことはないと思いますよ。

山田 そうですね。今、お会いしたばかりですし、ずいぶん年が離れていきますものね。

三男 すみません。結婚するのは僕じゃなくて、兄ちゃんなんです。

山田 分かっています。二番目のお兄さんとさっきおばあちゃんが……

……あ、おばあちゃんですよね。

雄吉 ええ、僕の母です。

山田 おばあちゃんが仰ってた春子さんと言う方が……。
雄吉 来週結婚するんです。

山田 （三男に寄るように）やっぱり、最近の結婚式は洋式ですよ

ね。ウエディングドレス、素敵だわ。

三男 さあ、どうなんでしょう。(雄吉に) あ、父さん、結婚式の挨拶の本、図書館で借りてきたよ。

言いながら、三男が雄吉に本を渡す。本を開いてみる雄吉。すると、山田が突然挨拶を始める。

山田 新郎の父でございます。本日はお忙しい中を、息子一郎夫婦のためにご臨席を賜り、まことにありがとうございます。

雄吉 ご臨席はちよつと固苦しいんじゃないでしょうか。

山田 そうでしょうか。でも父親のあいさつというものは、固苦しいぐらいのほうがいいらしいですよ。

三男 (雄吉に) さっきから気になってるんだけど、お客さん？

山田 (慌てて) あ、失礼しました。わたくし、あのシルバードリム社の……

保子が戻ってくる。

保子 すみません。お婆ちゃん、お花見の準備をしたって利かないもんですから。

山田 あ、やっぱりお花見にいらつしやるんですか。

保子を追って、芳江が再度登場。

芳江 保子さん、テレビのリモコン何処へいったか知らない。

保子 お母さん、ここですよ。

言いながら、保子がテーブルの上においてあったリモコンを芳江に渡す。芳江が三男を見て

芳江 あら、一郎帰ってきたの。(山田を見て) 夏江さんも久しぶりね。お仕事忙しいの。営業のお仕事だから、大変ね。

雄吉 (山田に) 夏江さんというのは、一郎の嫁なんです。

山田 はい。もう、頑張ってます。今も一軒売れそうなんです。

山田 でも、もうお仕事やめるんですよ。赤ちゃんのほうが大切よね。家なんか売れても売れなくてもどっちでもいいわ。お腹だいぶ大きくなってきたじゃないの。

三男 (山田に) 一郎兄さんとこは、もうすぐ出産なんです。

山田 あ、はい、もうすぐやめるんです。家なんて売れなくてもいいんですよ。

保子 お母さん。お部屋でテレビ見るんじゃないの。昼ドラ見るんでしょ。

言いながら、芳江を促して出て行く。

雄吉 (山田に) すみません。

山田 私、お腹出てます。

雄吉 すみません。

山田 私、まだ仕事やめないですよ。やめるもんですか。

保子が帰ってくる。

保子 ごめんなさいね。お母さん。自分のことはしっかりしてるんですけど、他人のことはだんだんわからなくなってきてるんです。

三男 まあ、いいんじゃないの。兄ちゃんはどっちも滅多に会わないから、顔忘れてしまったんだよ。

雄吉 老人性健忘症って奴かな。でも、不思議だよな。保子だけは間違えることがないんだ。

保子 そりゃあ、私は一日中、顔合わせてるんですもの。お母さんだって、忘れるわけないでしょ。

雄吉 そうだな。お母さんの顔さえ忘れなきゃ、大丈夫だ。

山田 大丈夫なことないですよ。

雄吉・保子 え!?!?

山田 おばあちゃんがいらっしやるなんて、最初に仰つらなかつたですね。

保子 すみません、まだ聞かれてなかつたもんですから。

山田 それも、少し惚けていらっしやる。

保子 惚けてるなんて、そんな、普通ですよ。おばあちゃん、全く普通です。身体だって丈夫だし、老人会に行ってもしっぴかりしてるって言われてるんです。

山田 さっき、お婆ちゃんにお渡しになったリモコン、失礼ですけど、この部屋の空調機のリモコンですよな。

保子 (俯いて) ……ええ。

山田 普通だっと思って思い込もうとされてるんじゃないんですか。失礼ですけど。ご家族の中では誤魔化せても、でもシルバーカントリーではダメなんです。後期高齢者の方の入居に関しては、厳密な健康診断を受けていただく必要があるんです。おそらくおばあちゃんの場合は、お断りすると思うんです。申し訳ないんですが、あとあと問題が起きませんように、これは皆

さんをお願いしているんです。

少し、気まずい間の後「どうも、今日は失礼を致しました」と言いながら山田が立ち上がり、帰り支度を始める。

山田　うちも同じなんです。父がテレビのリモコンを捜していると、母がクーラーのリモコンを渡して、父に見えないようにそつと父の好きな番組を付けておくんです。もうだいぶ前からそうなんです。母がいないと父は生きていけないんです。……でも二人とも幸せそうですよ。父と母の家には他人が入り込めない二人だけの時間が流れているんです。

保子　そうだったんですか。同じですね。

山田　（ふと、庭を見て）あ、花みずきが咲きかけている。

保子　（庭を見て）ええ、この間から少し膨らみかけてるんです。

山田　うちの近所の公園に花みずきの並木があるんですよ。

雄吉　花みずきの並木ですか。それは珍しい。

山田　はい。珍しいんです。それが全部白なんです。だから、夜、暗くなってから、そこを通ると数え切れなくらい沢山のゆりかもめが、春になって北の国に飛び立とうとしているように見えるんです。

保子　素敵ですね。幻想的で。

山田　そうですね。そこならおばあちゃんも一緒にいらっしやれるそうですよ。そこならおばあちゃんも一緒にいらっしやれるし、本当のシルバークントリーって、どんなお年寄りでも優しく迎えてくれるところですよね。

山田が部屋を出ていく。暫くして「ご苦労さまでした」と言いながら保子が玄関で見送っている様子。

三男が残されたパンフレットを見ているが、「あ、俺、部屋を片付けない」と言いながら出て行く。入れ違いに保子が戻ってきて、

保子　あら、三男は……。

雄吉　部屋を片付けるって。あいつももうすぐこの家を出ていくんだよ。

保子が、テーブルの上のものをキッチンに運び始める。

雄吉は三男が持ってきた慶弔関係の挨拶の本を開いて挨拶の練習を始める。

雄吉　本日は、皆様お忙しい中、ご参列を頂きありがとうございます。ごま

した。

保子（声） ご参列は変でしょう。それ、お葬式じゃないんですか。
雄吉 （別の頁を開いて） 本日は皆様お忙しい中、新郎、新婦のた
めにご列席を賜り、まことにありがとうございます。

保子（声） お父さん、早口でしょう。分かりやすく、ゆつくり言
ったほうがいいと思うわ。

雄吉 えー、両家を代表しまして、一言ご挨拶を申し述べます。

保子（声） お父さん、話すの下手だから、春子さんのお父さんに
やって戴いたら。

雄吉 （早口で） 一言ご挨拶を申し述べます。先ほどは二人が日頃
お世話になっております上司の方を始め、同僚の方や、お友
達の方にご祝辞を戴き……

保子が戻ってきて、雄吉の前に置き

保子 同僚の方や友達の挨拶はやらないって言っていましたよ。

雄吉 挨拶がなけりや、間がもたないんじゃないか。

保子 お料理を戴きながら、二人の小さいころのビデオを見たり、
式場で企画したアトラクションで結構忙しいみたいですよ。

雄吉 まあ、最近はそういうことももしれないな。披露宴は新郎、
新婦とそれぞれの親戚の顔合わせをして、会社の仲間や友達
との宴会は、また別の二次会でワイワイやるんだろ。

保子 それなら、一郎とこみにたいに式なんかやらないほうが、簡単
でいいのに。

雄吉 けじめだからな。

保子 仲人さんもなし、お友達の余興や挨拶もなしで、上司の方の
形式ばった挨拶や、お父さんのへたな挨拶を聞かされるんじ
や、みんながっかりするでしょうね、きっと。

雄吉 へたな挨拶で、皆様さぞやがっかりされたでしょうが、私が
二人に言いたいのは、これからの人生、二人で力を併せて明
るい楽しい家庭を築いていつてほしいということであります。

保子 私たちじゃないですか。

雄吉 え、何だって……？

保子 そんな形だけの言葉、あの子たちに要るもんですか。これか
ら力を併せて生きていかなきゃならないのは、私たちのほう
よ。私たちとおばあちゃんと、この家で……。私たちのシル
バーカントリはこの家なんですよ。

突然、はじかれたように、雄吉が力強く立ち上がって

雄吉

新郎・伊藤雄吉君六十歳は、新婦・保子さんと力を併せて、
これからの長い長い人生、明るい楽しい家庭を築いていつて
くれることを願っております。

(幕)